

複式学級での指導計画の作り方

はじめに

「複式の授業は苦手だな。」「どのようにすればいいのだろう。」等々、思われる先生方が多いのではないかと。実際、授業を行ってみると、確かに難しいと感じることが少なくない。また、授業展開が思いどおりにいかない場合も多々ある。しかし、日々の授業に慣れてくると、複式で展開する授業のことを考えるのが楽しくなってくる時がある。複式授業は教師の腕の見せどころ。目標や児童に身につけさせたいことを念頭に置き、教師の個性溢れる工夫を期待したい。

なお、本稿では、初めて複式授業に取り組む先生方への一助となるように、基本的なことから述べることにしたい。また、複式学級の人数は各学年とも複数人在籍していることを想定しているため、条件に合わない場合があるかもしれないがご了承ください。そして、英語指導助手が来校しない日を想定しているため、来校日には授業展開を工夫することができる余地が、さらに大きくなることもご承知おきいただきたい。

複式授業の概要

複式授業には大きく分けて2つの方法がある。「学年別指導」と「同単元指導」である。

複式指導	学年別指導		異教科の組み合わせ 同教科異単元の組み合わせ
	同単元指導	一本案	同内容・異程度で学年差が明確 共通指導場面を設定する。
		二本案	同内容・同程度で教材を構成する。 年度ごとに(A年度・B年度)教材が変わる。
		折衷案	一本案に一部二本案を入れる。 または、二本案に一本案を入れる。

図1 複式指導について

まず「学年別指導」は、それぞれの学年が違う内容の授業を同じ教室で受けていること。次に「同単元指導」は、細部に分けると5つほどに分類されるが、簡単に説明すると、5・6年生で学習することを組

同単元指導	類似内容指導		同じ領域の教材を指導する方法
	同内容指導	同内容 異程度	同じ教材で程度を変えての指導
		同内容 同程度	同じ教材で同程度の指導

図2 同単元指導

み合わせた2年間の指導計画を作成し、授業を行うことである。つまり、5・6年生が同じ授業を同じ教室で同時に受けている状態のことである。それぞれの方法には長所、短所があり、教員の配置や地域の特性等を合わせて考える必要がある。

「学年別指導」の長所としては、教科の系統性を踏まえた指導、そして学年の発達段階に応じた指導が容易であることである。特に外国語は積み上げの大切な教科であることから、児童は無理なく学習を進めることができると考えられる。また、児童の転出入に左右されないことも挙げられる。「学年別指導」の短所としては、授業を展開するうえで「直接指導」と「間接指導」の組み合わせや「わたり」の計画が複雑になり、授業の準備に時間がかかってしまうことである。「直接指導」、「間接指導」、「わたり」等の用語の意味については後述することにする。

「同単元指導」の長所は、指導内容が基本的なことに絞られ、授業の準備等が効率的になる。また、共通の教材を指導していることから、個別指導を充実させることができる。協同して授業に取り組むことから人間関係が深まり、社会性の育成が期待できる。以上のようなことが挙げられる。しかし、短所としては、上学年の指導内容の授業では下学年には難しいことが多い。系統性・順序性の強い教科では、指導計画の作成が難しい。そして、転出入の児童が多い学校では、履修できない事項が生じる可能性がある。教科書を2学年分請求し両学年にいきわたらせるため、注文時期に気を付けなければならない。教科書の無償配付は、児童一人に対して1回限りと

なっているため、5年生に進級した際に6年生用教科書も受け取った場合、翌年度に6年生用教科書を再び受け取ることはできない。

他に配慮すべきこととして、1年目に6年生の学習内容を必ず行わないと、6年生の中学校進学時に履修していない事項が生じてしまうことを念頭に置いていただきたい。「同単元指導」が基本どおりに行うことができるのは2年目以降となる。これは教科書改訂があるたびに同じことが繰り返され、なお且つ採択される教科書の発行会社にも変更があった場合には、少し難しい問題が起こることも予想される。

指導計画の作成

「学年別指導」か「同単元指導」のどちらを学校として選択し授業を進めていくか決めた後、1時間ごとの指導計画を考えなければならない。特に1年目は第6学年の指導内容を必ず履修しなければならないため、ここでは「学年別指導」を中心に話を進めることにする。「学年別指導」の長所として両学年と一緒に活動することを通してお互いを認め合うことにつながるため、交流できる場面を可能な限り取り入れるとよい。また、「同単元指導」の「折衷案」にも応用ができるので、授業づくりのヒントになればと思う。

まず、単元計画を考えるうえで留意しておかなければならないことを挙げておく。一つ目は、Lesson間の時数のずれがないかということ。各学年の単元配当時数がLessonごとに異なる場合がある。準拠指導書の指導・評価編（以下、「指導・評価編」と示す）に掲載している標準的な年間指導計画案の場合、Lesson 1～6は両学年ともすべて7時間配当であるため、同時に単元を始め、同時に終わられるペースで進行できる。しかし、5年はLesson 7以降も7時間配当であるのに対し、6年Lesson 7と8がそれぞれ5時間配当のため、調整を加えなかった場合、Final Activity等が両学年同時に行えないことや、単元の導入時に片方の学年は単元の途中であるケースが生じることがある。導入時には新出語彙等を指導することに時間が必要なため、あらかじめ単元途中の学年に配慮して発表資料づくりや自分たちだけで活動できるゲームなど、活動内容を考えておかなければ

ならない。

二つ目は、5・6年生が発表活動を同時に行う際に、6年生の発表内容を5年生が理解できるように教員は単元計画を工夫する必要があり、また、6年生も5年生を意識した発表方法を考える必要がある。これは短所のようにとらえられるかもしれないが、5年生は次年度に向けての予習や興味の高まりにつながり、6年生は5年生時の復習になると同時に、ジェスチャー表現や発表資料づくりの工夫につながるため、学習をより深く進めやすくなると感じたことがある。

三つ目は、「学年別指導」の場合、間接指導時にデジタル教材を多用するため、電子黒板等を2セット用意し、児童が利用できるようにしておく必要があるということである。都合で1セットしか準備できない場合は、学級の人数にもよるが、必ずしも電子黒板である必要はなく、パソコンと少し大きめのパソコン用モニターとスピーカーがあれば十分である。

今回は、第5、6学年それぞれのLesson 1を利用して話を進めることにする。授業展開は基本的にバックワードデザインで考えられている。指導・評価編では、年度初めに2時間のガイダンス活動をした後で、両学年ともLesson 1はあいさつ・自己紹介の学習を行う展開を掲載している。そのため、5・6年生で合同の活動を設定しやすい単元である。

では、複式授業づくりについて述べることにする。ここまでに、いくつか複式特有の用語が登場したが、授業展開において使用される用語があるので説明しておく。（「図3 複式展開例1」参照）「直接指導」とは、一方の学年の児童に教師が直接的に行う指導のこと。「間接指導」は、直接指導できないもう一方の学年の児童が、自主的に学習が進められるよう指示を与えておいて行われる指導。「同時間接指導」は、両学年が自主的な学習をしているとき、机間巡視をしながら指導をしたり評価をしたりしていること。「わたり」は、教師が、一方の学年から他方の学年の直接指導に移る際、学年の間を渡り歩く教師の動きのこと。「ずらし」は両学年を同時に直接指導できないとき、直接指導と間接指導を組み合わせていることである。

える。しかし、向き不向きはあるので、少し説明をしておきたい。

(2)Let's Sing: ABC Song 2 (4分)		(2)Small Talk (3分)
(3)The Alphabet ① ⑤(8分)		(3)めあてと見通し (1分)
(4)Small Talk (5分)		本時のめあて 好きな たずねたり答えたり
(5)めあてと見通し (1分)		(4)Let's Watch (5分)
つづり方をたずねた 。		(5)Let's Say It Together (5分)
(6)Activity 2 (20分)		(6)Activity ●自由にたずねて みよう。(10分)
		(7)やりとり(8分)

図5 複式展開例3 5時間目一部抜粋

図5を見ればご理解いただけるかと思うが、指導者用デジタル教科書(教材)を利用すると「間接指導」を行いやすいということである。特に、歌を扱うLet's Singや口慣らしをするためのLet's Say It Togetherは繰り返し聞く必要があるため、「間接指導」に向いている。また、Let's ListenやReviewも活動内容が児童にとって分かりやすく、一度で聞き取ることができないときは何回も聞き直すことができるため、自主的な学習に向いている。

一方、Let's Thinkは児童の反応を見たり、状況の説明や考えることを促したりするため、こちらは「直接指導」に向いている。The AlphabetやSounds and Lettersも日本語での説明が必要なことが多いため、「直接指導」に向いていると言える。また、Let's Read and Write, Activityなど、評価機会として活用したい活動は「同時間接指導」または「直接指導」にする必要がある。

このようなことから、指導者が各活動をどのように使いたいかによって、利用のしかたが変わってく

るであろう。ただ、外国語の習得は一朝一夕にはできないため、単位時間だけでの評価も大切だが、単元をとおして評価していく必要もある。そのためにも、評価のしかたもふまえたうえで、授業でどの活動をどのように配置していくか計画していくことも大切である。

終わりに

ここまで、複式学級での指導計画の作り方について述べてきたが、大規模校や複数学級がある学校とは違って気をつけておかなければならないことを述べておく。

少人数学級の場合、幼少期より同じ集団で生活をしているため、様々な活動を行っても相手の新しいことを発見することは難しい。そのため、各学級の児童に応じたインフォメーションギャップの起こりやすい活動を取り入れなければ、授業に新鮮味がなく、各活動に目的をもって取り組むことが難しくなる傾向にある。

授業毎に行うあいさつでは、「なりきりあいさつ」というのを行ったことがある。これは数種類のくじを作り、引いたくじに書かれている人物等になりきってあいさつをし、最後にどのような役を演じていたかを当てるといったゲーム的要素を取り入れたものである。この時に児童が楽しんで取り組んだのはもちろんのこと、役を演じることが上手であることを認められたり、称賛されることで自信につながったりすることもあった。また、外国語で役を演じることによって口調や話す速さを変えたり、ジェスチャーの大切さに気づいたりすることもあった。しかし、パターン化して毎回同じことをしているとマンネリ化してしまうため、教師は様々な活動を用意しておく必要がある。

限られた例しか紹介することができないが、先生方には、児童が楽しんで、そして進んで外国語を身につけようとする姿勢をもつことができるように、さらなる授業展開の工夫に取り組んでいただきたい。